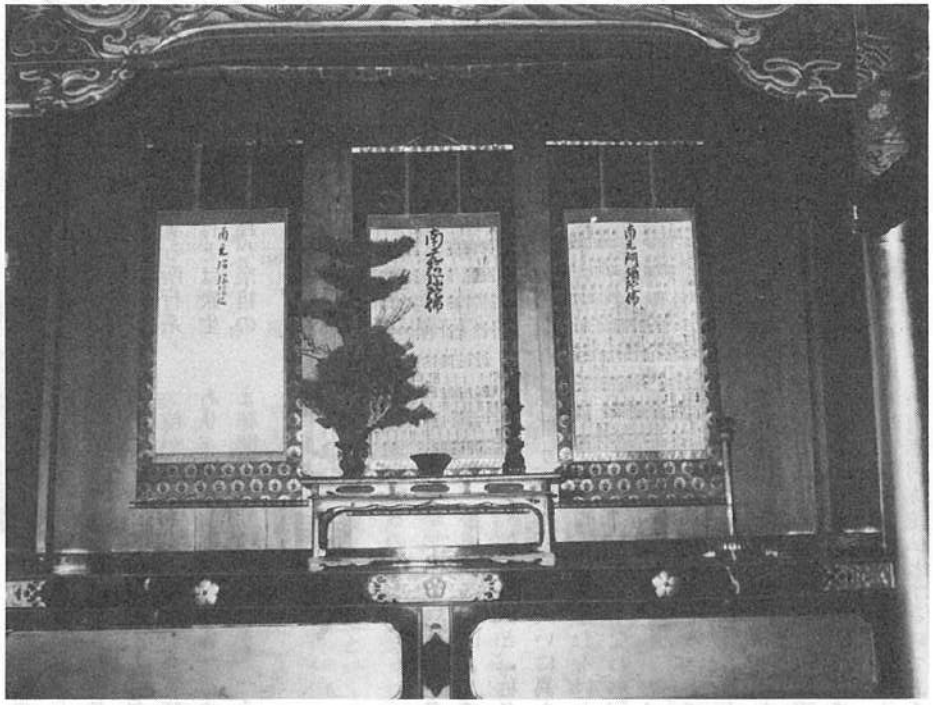
寺報
善巧（センケウ）

発行
〒938 富山県下新川郡
宇奈月町浦山497
白雪山 善巧寺
☎宇奈月(07656)(5)-0055

寺ごよみ

七月

一日 お講 音沢
三法要実行委員会
〈永代祠堂会〉
一四日 午後一時
一五日 午後一時
一六日 午後十一時 お講
午後一時
一七日 午後一時
一八日 午後一時
一九日 午後一時
二〇日 午後一時 講座
この日は内陣焼香がありますので内陣法名の施主は必ずおまいり下さい。
★なお、今回はバス運行はありません。
二五日 日曜学校 午前六時半よりラジオ体操、朝のおつとめとお話、朝がゆ接待があります。親子連れで、夏休みの朝のひとときをお寺でお過ごし下さい。



七月十四日～二十日迄

永代祠堂会

法話 里村了学師

詞堂会は全門徒の御法要です。私達は、善巧寺本堂で行われる門徒法要を、「上げ法事」と申して居り、善巧寺所蔵の阿弥陀如来の幅を各家庭に御移しして勤修する法要を、「自宅法要」と申して居ります。申す迄もなく、夫々の御宅で亡くなった方の命日に、御縁の方々が集まって営まれる御法要です。

これに対して、詞堂会は、一年一度、善巧寺本堂で、全門徒の物故者の為に行われるいわば「総法要」と申すべき法要です。

「上げ法事」「自宅法事」「総法事」と三つに分けては見ましたが、この区別は、全く便宜上の区別であって、浄土真宗の法要は、ただ一つであり、法要の精神に、差別がある筈はありません。

従って、自宅での法要を勤めたから詞堂会の法要には参詣しなくてもいい等と言う事は全くありません。

一人で悦ぶよりも、二人。自分だけで悦ぶよりも、全門徒で悦ぶ。これが、詞堂会の精神であり、一年一度の大合掌であり、総念仏である筈です。善巧寺の内陣に、御門徒の法名軸が掲げられるようになってから、早いもので六年になります。御承知のように、現在は、第三幅となりました。

昭和五十七年七月を基点とするならば、御門徒の先祖は、三百年、四百年の過去にさかのぼれるし、未来は、それこそ無限でしょう。過去にしても、未来にしても、内陣法名軸に誌される法名は、第三幅どころか、百幅あっても足りないでしょう。このようにして、善巧寺は、過去から未来に亘って、門徒と共にあり、又、あり続けねばなりません。

第三幅に、私は、心をこめて、「南無阿弥陀仏」と書きました。今後、第四幅、第五幅と、生命の続く限り書きつづけることでしょう。

第三幅から、法名を記す一劃一劃の大きさが大分小さくなりました。

総計、二百九十六区劃あります。この区劃の一つ一つに、私は心をこめて、法名の一字一字を書いて居ります。そして、その度に、善巧寺住職に生まれた尊い宿縁を感じ、同時に大きな責任を思念致します。今年も、内陣法名軸の前で、皆さんと御一緒に、合掌させて頂く日を楽しみにして居ります。

内陣法名第三幅

住職 雪山俊之

明教院僧鎔は何を説いたか

空と華と

明教院僧鎔伝

空華学轍の思想

勧学寮頭 桐溪順忍師

行信論（何によって往生するか）

行巻の始めに示された文を忠実にみると、大行とは「諸仏の称名」であるという表現（名号）と「衆生の称名」だという表現（称名）との二つがある。そのいづれを主とするかにより能行系と所行系との学派が出来るのである。

能行系の人びとは「大行とはすなわち、無碍光如来のみ名を称するなり」と宗祖が申されているのだから、大行は衆生の称名でなければならないのであると主張するのである。この場合には、何故に宗祖は第十七の諸仏称名の願を出されたのかが、解決しなければならない問題となるのである。

また、大行とは「諸仏の称名であり、衆生にとって所聞の名号である」と主張する所行系の学者にとっては「大行とは衆生の称名である」と申された宗祖の言葉をどう理解するかが問題となるのである。それで所行系の学者のほかには「称無碍光如来名」の「称」を「かなう」という意味で「大行とは無碍光如来のみ名にかなう」ことであると解釈する方もあったのである。しかしあの文はすなおに無碍光如来のみ名を称える、称名大行を示す文を見るのが当然である。それで空華の学者たちは、あの文によって、衆生の称名も大行といわれるのであると説くのである。それで大行とは名号でもあり称名でもある。しかも、その名号と称名とは不二であるから、いずれも大行とはいえるが、その究竟的な立場からいえば、法体である名号が主になるのであるというのが「能所不二、鎔融無碍の法体大行」という空華の説である。

なぜ不二といえるか

では、どうして衆生の称名が諸仏の称名（名号）と不二になるのかというに、その重要な表現の一に「称即名とまきあがる」というものがある。それがこの学轍の不二の最要の表現であるとも思われるのである。それは衆生の称名がそのまま諸仏の称名である名号と「位が同じく」なるという意味であり、自分の称えた称名がそのまま聴聞の名号の位にまきあがるのだと主張するのである。

如来のよび声を聞く

ここに空華学轍のいう「称名」の意味が、善導・法然によって説かれてきた。称名念仏と、称名の意味、念仏の意味が大いに異なるものがあることに注意しなければならないのである。すなわち、行巻の「称無碍光如来名」とは、無碍光如来のみ名を称えることではあるが、それは在来、日本浄土教で用いられて来た称名ではなく、自分の口から出て下さる南無阿弥陀仏ではあるが、それは行巻で示される「本願招喚の勅命」としての南無阿弥陀仏とするのである。

だから、この六字釈の意味からいえば「称無碍光如来名」の称名は、信後の報恩の称名ではなく、自分の口から出るものではあるが阿弥陀如来が「我れに帰せよ」の招喚の勅命であり、自分にとっては聞きものという立場に立つものである。この意味で「称即名とまきあがる」というのである。

この行巻の六字釈がなければ、諸仏の称名と衆生の称名とが不二一体であるという意味が、十分理解することが出来ないのではないか。名号が称えられているのだから、能称と所称とが不二だといわれても十分ではないが、私の称名が単なる仏名を称するものではなく、如来のよび声であり、本願招喚の勅命であり、称えながら聞きものである場合でハッキリと称即名といえるのである。

それは諸仏の称名は、私にとって聞きものである。もし私の口から出て下さる南無阿弥陀仏が如来のよび声であったら、私の口から出るものではあるが、私にとっては「聞きもの」である。諸仏の称名も聞きものであり、私の称名も聞きものであるという立場にたったとき、はじめて純粋に「私の称名」が「諸仏の称名」と不二一体になるのである。そこにはじめて能所不二であり、しかも、所称の法体の名号を大行という説が成立するのである。

この意味で行信論を論ずる場合行巻の六字釈は注目すべきものではないか、経文の引用が終わって称名破満が説かれ、龍樹以下五祖の引用が終わった私釈に六字釈を出しその名号によって必得往生と示されているのであるが、この帰命釈は在来の解釈とは全く異った解釈をほどこし、衆生のものであるべき帰命を如来の勅命とされたのである。これは在来の称仏名は衆生の称名であったものを、諸仏の称名と同じく、衆生は称えながら所聞の位で味わうべきことを示されたもののようである。この立場で「称無碍光如来名」を理解しなければ「称即名とまきあがる」とか「衆生の称名がそのまま諸仏の称名と同位になる」という意味が十分理解されないのである。

寺ごよみ

八月

一日 日曜学校
　お講 石田・生地・中新
一〇日 夏の夜の一泊聞法
一一日 暁天講座 朝がゆ接待
　講師は、行信教校教授、利井明弘師。おさそい合わせの上、泊り込みでおまいり下さい。
一五日 浦山こども盆踊り大会
一六日 浦山地区盆踊り大会
一九日 総代会
二二日 早朝日曜学校
二九日 雪ん子夏の公演

秋の法要 11月3〜5日

空華の学匠一堂に

いよいよこの秋お迎えする大法要―宗祖親鸞聖人の七百回忌、明教院僧鎔師の二百回忌に、大谷光照前門主貌下がご親修下さることは善巧寺の門信徒一同、大いなる喜びでありますが、さらに加わえてこのたびの法要には、空華の学匠、学僧の方々が続々お見えになり、善巧寺はじまって以来のまたとない聞法の秋になりそうです。

十一月三日、法要初日は、富山の真宗史家で明教院ゆかりの寺、上市・明光寺の住職、土井了宗師と、空華学輪の流れを汲む、大阪の行信教校校長、利井興弘師。

四日は、本山勧学で行信教校、竜谷大学の教授と伝道院院長をなさっている、山本仏骨和上。

五日は、本山勧学寮頭で、空華末弟と自らおっしゃる、桐溪順忍和上のほか、行信教校や空華の流れを汲む学匠、学僧の方々が多数お参りになる予定です。

三法要実行委員会では、七月一日から、いよいよその準備体制に入りますが、門信徒の方々もこの大事業に対して、物心両面で出来るかぎりのご協力をお願い致します。

空華・僧鎔展も開催

僧鎔師二百回忌を記念して法要期間中「空華僧鎔展」が開催されることが決まりました。

これは、法要初日にご講演いただく土井了宗師の全面的なご協力によって開催されるもので、僧鎔師の遺墨、著書のほか、空華学派の流れを知る上でも貴重な資料が数多く展示されます。

八月ごろから土井先生の指導を仰ぎながら、実行委員会の方たちが資料集めにかかり、有意義な展覧会にする意気込みです。なお会場は、寺の後堂―本堂裏の回廊が使われることになっています。

慶びの春　■宗祖誕生 800年　◇57年4月29日

聞法の秋　■宗祖 700回忌　■明教院 200回忌　◇57年11月3〜5日

春の法要記念色紙

読み方は「願門」です

春の慶讃法要に記念として明教院僧鎔師の色紙をお持ち帰りいただいたことと思いますが、いったい、この色紙にある字は、どう読めばよいのか―お問い合わせもかなりありました。

じつは、お渡しするときに、包紙にその読み方やおいわれなどを刷り込む予定だったのですが、どうにもこの字が読み切れなかったのであります。

若栗の光照寺様より原本を拝借して以来、字体に関する辞書を引いたり、書の心得のある方にも見ていただいていたのですが、当初はどうしても「形」という字のくずしにしか読めなかったのです。

ところが「形」では、空華の祖としての僧鎔師が書かれる理由が推察できかねますし、そんなこんなで、説明を刷り込まなかったのです。

ところが、この色紙を、記念講演でお越しいただいた書誌学の権威者である、宮崎圓遵先生にお見せしたところ、かなりの時間ご考察いただいて、ようやく「願門」とお読み下さったのです。

色紙中央の大きい字にだけとらわれると、どうしても「形」と読めるが、その右下に「つ」という墨のよごれのようなものがある。これはよごれではなく「門」の字で、下が「門」となれば、これは明らかに「願門」と読まねばならない―とのことでありました。

「願門」―ご承知のように、その願いは如来の願いであります。門は「門門不同八万四千」とあるように、転迷開悟の門は同じではなく、八万四千も構えはあります。しかし、この私が、間違いなく、救われ、仏になりうる開かれた門は、阿弥陀如来の弘願門しかありません。そこを、僧鎔師はよろこばれて、この一筆となったのであります。どうぞいま一度色紙をながめて、このように味わって下さい。

法要記念袋はどう読む？

春の法要、そして秋の法要にも使用される手さげ袋に「㊞」のマークが入っていますが、これはご承知かと思いますが、僧鎔師を祖とする空華学輪のシンボルマークです。○は空、花は華。当時の焼印を拡大して刷りました。

その紙袋のもう一方には、行信教校、利井校長の讃が書かれています。「法は流れる二百年、鎔師空華の春」―と読みます。明教院の説かれた念仏の味わいは脈々と、二百回忌を迎えた今も息づいているという慶びの言葉であります。

慶びの春 ■宗祖誕生 800年 ◇57年4月29日

■宗祖 700回忌 ■明教院 200回忌 ◇57年11月3～5日 聞法の秋

《慶讃法要記念講演》「宗祖九十年の生涯」

本山勧学 宮崎圓遵師

自ら誇らず，他を裁かず

親鸞聖人がおいでになったころ同じように九つのときに出家された、明恵上人という大変徳の高いお方がおられました。

その方が常におっしゃったことは「人はあるべきようはという七字を覚えて、これを実行するように」ということであります。

男は男としてのあるべきよう
女は女としてのあるべきよう

また、商売の人は商人としてあるべきよう、農業の方は農業の人としてのあるべきよう――その〝あるべきようは〟という七字を覚えておくようにとおっしゃったということでありますが、この時代は学問といいますと比叡山と奈良と二つあったわけであります。

で、この〝あるべきようは〟というのは奈良の方の教えであります。

それでは比叡山の教えはどうであったかといいますと〝身のほどを知れ〟というのであります。

親鸞聖人も比叡山で学問をなさって、この〝身のほどを知れ〟ということを学ばれたと思うのであります。

この、身のほどを知れということは、自分がどんな人間であるかということをよく見極わめよ、ということであります。内心に深く反省をせよ、ということでありますが、これは一体、どうして比叡山の教えになったかと申しますと伝教大師という比叡山を開かれた方が、この身のほどを知れということを教えられました。で、自分は愚中の愚、自分ほど馬鹿なものはない。また、何の行もできないのが自分であると、非常に自分というものをみつめられた方です。

それが比叡山の教えであったのです。で、これはまた、どこからきたかと申しますと、聖徳太子様が教えられたものであります。真宗の方はだれでも凡夫ということをよくご承知だと思いますが、いずれの行もおよびがたき凡夫であるということを、日本で初めて申されたのが聖徳太子であります。

われらは凡夫である、いたらぬところの多いものであると反省して、そして仏の教えを聞かねばならないと、このように教えられたのが太子であります。

それ以来、比叡山では太子の教えを広めようとされたのが伝教大師でありますので「身のほどを知れ」はついに比叡山の教えとなったのであります。

そして、その教えがどこへ伝わったかというと、横川という源信和尚もおられたところであります。源信和尚は「それ往生極楽の教行は濁世末代の目足なり」とお念仏を讃えられ、そして「予がごとき頑魯のもの」とこうおっしゃる。あれほどすぐれた学者でありながら、かたくなでおろかな私には、とうてい仏教の多くの教は実行することができない、それだからお念仏に帰するのであるーと、自分の身のほどをどこまでも見つめておられる。それが横川の精神であります。

親鸞聖人はこの横川で学問されたのでその教えをずっと受けておられたわけです。ですから、自らを愚禿と名乗られています。で、この愚禿というのはどういうことかといいますと、愚痴極まりなくいずれの行もおよびがたきものであるという意味ですが、それを自分の名とされた。

〝愚禿〟の系譜

このことばがどこからきたかといいますと、伝教大師の書物にあるわけです。こうしたことから聖人が比叡山におられたというのには非常に大きな意味があります。

ことに横川におられたということは、それだけ、身のほどを知れという教えを実行されということになり、それが、法然上人へとつながり、お念仏の道へと入ってゆかれたということにもなるのです。

そういうことを考えてゆきますと、あなた方はどういう印象をうけられますか？ 親鸞聖人は煩悩具足の凡夫などとおっしゃるからぬかるみの中をひとりトボトボメソメソと杖をたよりに歩いているようなずいぶん弱々しい聖人と、お考えになっておられるのではないかと思うんです。

しかし、決してそうではない。聖人はこの時代の政治、文化に対して非常に積極的に取り組まれた方であります。

例えば流罪になられたとき「主上臣下法に背き、義に違し、忿（いかり）をなし、怨（うらみ）をむすぶ」といわれ、はっきりと時の政治に対しても批判をしておられる。ただだまっておられた方ではないわけです。

身のほどを知り

それからまた、聖人の時代には何回となく念仏禁止という令が出ましたが、それに対しても批判され、「おのれの分を思慮せよ」とおっしゃっている。つまり、念仏を弾圧するとはどういうことか、自分の身のほどを知れ、とおっしゃっています。

また、聖人は文化に対しては新取の心があった方で、現在の研究では、当時の中国の一番新しい文化を取り入れられたのが聖人です。

こうみてゆきますと、聖人は当時の政治や文化に決し目を瞑っていらっしゃった方ではないということがわかります。

ところで聖人ほど、いろいろなものの見方を変えられた方もないのでありまして、仏教というものも、聖人以前は現代祈禱の具であったのですが、それを正しく自分を見つめ、身のほどを知って愚禿の境地に達して阿弥陀様のお慈悲をあおぐことこそ本当の仏教だと申されたのが聖人であります。

従来の宗教・社会・人間観を鋭く批判

また、人間の値打についても、地位や財産や名誉などというものを我々は価値あるものとみるのですが、そういうものは決して尊いものではないのであって、念仏の信をいただいたものこそ、最も正しい人間であり、尊い人間であるとおっしゃった。

こううかがってまいりますと、聖人という方は、メソメソした方では決してない。非常にたくましく、大きな方で、胸を張ってお念仏をよろこばれた方だということがよくおわかりかと思うのであります。それはもちろん、信によって与えられた、諸仏に等しい、如来に等しいという人間としての最高の尊厳に裏付けられたことだからであるともいえましょう。

こうして聖人はあらゆるものの見方を変えられました。人間の値打も変えられ、社会というものも見方を変えられました。社会というのは政治で治められているけれども政治では決して平和はこない。お互いに自分の身のほどを知れば他人を悪い人間として裁くことができない。そう、愚禿ということはそういうことです。自ら誇らず他を裁かずということです。この宗教的な立場に立ってはじめて、お互いが助け合って平和な社会を築くことができるわけであります。

短い時間でしたので、ことばをつくせなかったのですが、肝要は聖人のおっしゃるごとく、お念仏こそ一番尊いものであり、お念仏によって、よりよき自己と、よりよき現実とを作ること、それこそが聖人の一生涯の願いであったということを銘記していただきたいと思うのであります。

講師紹介

宮崎和上は、明治三十九年和歌山生まれ。龍谷大学名誉教授、文学博士、本山勧学で、著書に「真宗書誌学の研究」「中世仏教と庶民生活」「初期真宗の研究」「親鸞とその門弟」などがあり、五十五年に安居にて「正像末和讃」を講述されました。

宮崎和上は宗祖を常に史実に基づいて仰がれ、その考察はこれまでの弱々しい宗祖観から、力強く生きた人間親鸞へと高められました。

今回の記念講演もこうした師の研究の集成ともいうべき宗祖観をやさしく私達にお開かせ下さいました。愚禿の境地に立った宗祖のたくましい生き方を十分に味わって下さい。

住職日記

六月二十三日　終日曇。天気予報は、毎日雨だが、入梅以来、一向に降らない。

起床、洗面の後、庭に出て見る。十薬、雪の下が、白い花を一面に咲かせている。可憐愛すべし。擬宝珠（ぎぼし）も花期だし、何よりも紫陽花（あじさい）の紫が云いようもなく美しい。金枝梅は、黄色の蕾を覗かせている。

朝食の、頂きものの、新じゃがいもの煮付うまし。

昨日に続き今日も滋賀教区からの遠来の客を迎えるに当たり、明教院門侶帖を点検する。果して、江州からの門侶の名を見付ける。

江州滋賀群和邇崎　慶寺寺　二男　乗空。江州西光寺　嗣法　順教。二男　遵実。の落款（らっかん）。

八時五十分、大型バス四台にて、輪番以下滋賀教区総代会の僧俗百七十名を迎える。若院も坊守も関西の育ちで、親近感を覚えるようだ。晨朝勤行の後、若院と二人で法話。

十時半。寺詣り、十一名。午後一時からの、一周忌法要の方々だが、村の衆が多く、顔見知りの打解けた挨拶を交わす。本堂のお勤めは例によって「東方偈。」

一時より　太子、七高僧を迎えての法要。仏は、昨年の今日、職務中の急逝で、同じ職場の同僚、友人も列席して下さっている。「表白文」を上げていると、故人の千軍万馬の活躍ぶりが、自づと胸に浮んで来る。陽気だった故人を偲んでゆっくり飲んでほしいとの未亡人の注文で、腰を落付けて御馳走になる。

四女、夫々に、恰好のお聟さんと結ばれ、蓮（はちす）の上の仏も、笑みを浮べて居られるに違いない。

お土産に好物の花園饅頭を頂く。帰院　午後五時半。

寺族婦人会の九月の一日旅行行程につき、坊守より相談を受け、地図を拡げて、吉崎御坊、那谷寺と、バスの順路を検討する。

組長さんも一緒に、同行することとなるだろう。今にも降りそうな天気が、どうやら曇り空のまま経過。就床　十時。

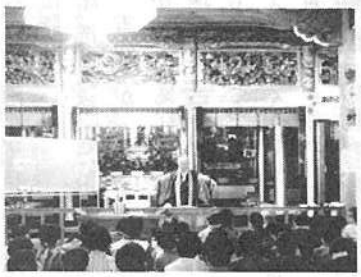
客迎う　紫陽花（あじさい）の寺　高僧碑

窓下に　雪の下あり　擬宝珠（ぎぼし）あり

善巧寺仏婦「白鵠会」初会合

正副会長は三ヵ寺坊守
新会員募集

入会 一万円
月費 五百円



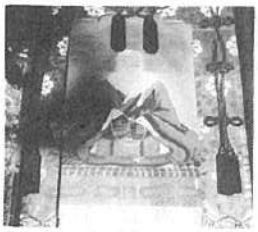
春の法要をご縁に結成された善巧寺の仏教婦人会「白鵠会（びゃっこうかい）」は、六月一日、初の会合を開き、会長に善巧寺坊守、副会長に、同若坊守、法輪寺、照行寺の坊守を選び、地区ごとに世話係をおいて、これからの活動の第一歩を踏み出すことにしました。

現在の会員は前卓等の特別寄進をなさった方々でいわば発起人。これから新会員を募集するについては、入会金一万円、月会費五百円とし、これを運営資金として、年二回の聞法会、その他研修、親睦会を催すことにしています。

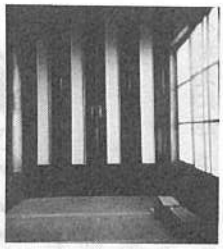
門信徒のご婦人の方で、入会ご希望の方は、寺の事務所へなるべくお早目に申し込み下さい。

なお、この日の初会合のあと聞法会が開かれ、行信教校の利井興弘校長に、記念講演をしていただきました。

ご寄進



★御開山用戸帳 生地の船屋巧さん。宗祖の真向のご影のまわりをお飾りする戸帳と糸華鬘、揚巻がかなりいたんでおりましたので、法要を記念に新調させていただきました。真宗の戸帳は御厨子の前面に垂れる金欄の布で門の字型に切り抜いてありいつでも尊像を礼拝できるようにしてあります。中央の上には糸華鬘を飾り、両わきには揚巻と



ご縁のある方で、今回の法要では境内整備にご協力願っておりました。

★境内水銀灯 夢を語る会の皆さん。スイッチ一つで境内をくまなく照らす水銀灯を。

★松 山本浅次郎さん。その水銀灯の前に、法要記念にと松を一本。

★本堂脇戸 南保運輸さん。後堂との間の開き戸が老朽化しており、これも法要記念に新調いたしました。南保さんは法輪寺さんに

内陣法名のおすすめ

寺の内陣法名というのをご存知ない方がいらっしゃるようです。永代祠堂会も近いのでご案内とおすすめをさせていただきます。

内陣法名は、寺への祠堂（特別懇志）一口五万円につき、故人の法名一つを、寺の内陣の大法名軸へ記載させていただくというもので、毎年祠堂経のお満座の二十日に、施主の方々の内陣焼香が行われます。「内陣に法名をあげてからお寺が近く感じるようになった」とよろこばれています。あなたもどうぞお申し込みを。

ご寄進お願い

いま、あなたの善巧寺は刻一刻と荘厳さを増して春の法要を終え秋の法要を迎えようとしています。

このご勝縁を記念して、是非お願いしたいのは、門信徒の方々のご寄進です。秋までになんとかしていただけないものかという法物を列記いたしますと――◇門前寺号石柱◇車庫前式幕◇本堂山号額◇ご本尊用戸帳◇打敷◇高座◇七条――などであります。単品をお一人ならなお結構ですが、そうでなくとも一口五～十万程度のご寄進をよろしくお願いいたします。

雪ん子劇団表彰

ことばの教室雪ん子劇団が、このほど黒部ライオンズクラブから地域文化の向上につくしたとして表彰され、二十万円の奨励金をいただきました。

この劇団は毎週月曜日にお寺に集まって練習をつづけているのですが、最近ますます演技に磨きがかかり、六月の宇奈月青年祭ほか富山こどもフェスティバルへの出演、さらには新湊からも出演交渉がくるなど、なかなかの売れっ子。これからも、明るく楽しくがんばります。応援してやって下さい。

善巧寺の常例行事

お講	毎月 一日・十六日
日曜学校	毎月 第四日曜日
雪ん子劇団	毎週 月曜 四時
壮年会	毎月 第二土曜日
婦人会	毎月 第一月曜日
お経の会	第一・第三土曜日

合掌

春の法要が終わってホッとひと息。反省会ならぬ反芻（はんすう）会をウシのように何度も繰り返していましたら、はやくも秋の法要の足音が聞こえてまいりました。

この寺報の発行される七月一日は、法要実行委員会の会合が開かれます。議題は「秋の法要の内容と、予算について」であります。

多くの話題をよんだ華やかな春の法要とまたひと味違った、味わい深い聞法の秋にしたいものです。

◇

宮崎和上の記念講演を一挙掲載いたしました。「あるべきよう」を追うのではなく「身の程を知り自ら誇らず他を裁かず」という宗祖の心を十分にいただいて下さい。

◇

法要をご縁に本堂の輪灯を本火にいたしました。お油に灯芯のぬくもりある光を味わって下さい。